

月

月も太陽とならぶ最高神とされて、この二つはミートンダ(夫婦)です。月は「ジーキ(土地)」と呼ばれることから、穀物をつかさどり、生産するものとも考えられてきました。12年に一度行われていたイザイホーも満月の夜から始まったそうです。また、今も旧暦8月15日の十五夜は豊作と健康祈願が行われています。

あたいぐわーと くらし

久高島は琉球王朝時代からの「地割制」が残る唯一の地域。土地は島民皆のものとして、よくみると小石で区画ごとに均等に区切られているのがわかります。分配されたあたいぐわー(箱畑)では、エネルギー溢れる島野菜や穀物が個性豊かに育っています。



五穀発祥の地

東海岸に位置するイシキ浜。『琉球国由来記』ではこの浜に五穀(麦・粟・豆・キビなど)が入った壺が流れつき、久高島から沖縄本島へと農業が広まったとされています。



いのり

沖縄の創生の神アマミキヨが初めて降り立ち、島創りを始めたと言われるこの島は、沖縄の中でも、存在そのものに特に深い意味をもちます。いのりに始まる祭祀や神事——。古来、厳格に守り伝えられてきた聖域や文化は、いのりと共に次の世代へと引き継がれています。

太陽

沖縄本島の東側、太陽ののぼる方向に位置する久高島。「自然」という概念ができる以前から、島の人たちにとって太陽は最も尊い存在の神でした。特に守護力が強いのは海を七色に染め上げながら中天に来るまでの午前中で、その間に願い事をすませることが大切とされています。

海

現世の久高島と、来世のニラーハラー(ニライカナイ・神々がすむ理想郷)をつなぐ海は祭祀の場では「リュークウ」と呼ばれ、他界空間とされています。久高島の人々にとって、海は命をつなぐ食糧をもたらしてくれる豊かなイノー(サンゴ礁の浅瀬)であると共に、フカ(リーフ外)は畏怖の存在だったのです。

イラブー漁

旧暦6月から12月末までの間、夜に行われます。「イラブーは耳で獲る」というように、漁場に耳を当てるようにして伏せ、サラサラとイラブーが砂場を這う音が聞こえたら手探りで捕獲します。現在も、同じ方法で漁が行われています。

イラブー

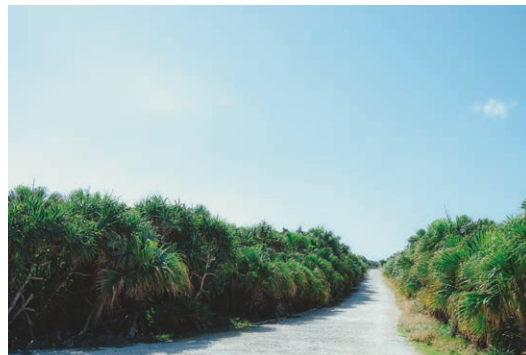
海中を悠々と泳ぐイラブー(エラブウミヘビ)は、ニラーハラーからの贈り物として、久高島では特別に扱われてきました。夜中のイラブー漁に始まり、主祭場の御殿庭(ウドンミヤ)にある「バンカイヤー」で行う独自の燻製加工までが神事として、現在も執り行われています。燻製加工されたイラブーはかつて「クスイムン(薬用)」として、貴重な存在でした。現在も、滋養あふれるスープ「シンジムン」をはじめ、久高島産の燻製イラブーは唯一無二の存在として感謝のいのりと共に大切に出荷されています。

共に暮らし、
共に生きる

久高島の
宝石たち

自然との共棲の中で
受け継がれてきた
いのちの智慧がここに

島のものづくり原点



久高島

厳格で素朴な久高島の
くらしを色濃く映す

島のものづくり原点

沖縄本島南部、南城市知念半島より約6キロメートルの東方海上に浮かぶ久高島。沖縄の創生の神アマミキヨが初めて降り立った島として琉球文化において特別な歴史を歩んできました。

長い年月の中で自然界からの恵みを受け、いのちをつないできた沖縄の人々の智慧。そして久高島の人たちが生涯を捧げた、いのりと信仰の神髄が祭祀の中に刻まれ、厳格に受け継がれてきました。いつの時代もこれらを通じて私たちに大切なことを伝え続けてくれています。

島全体が聖域とされる久高島。この島ではいのりと共に、素朴でありのままのくらしが今も続いています。神事とされるイラブーの焼製づくりをはじめ、久高島からうまれるものづくりは、こうした先人たちの智慧と島がもつ独自のエネルギー、そして自然への畏敬の念と深くつながっています。

